



第40回 お客様  
慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ  
統合研究機構教授

## 中村伊知哉さん

岡野光喜理事長が、各界でご活躍のお客さまを迎えて対談する「トウギャザートーク」。第40回目のお客さまは、通信や放送、ポップカルチャーに精通する中村伊知哉教授。今回は、中村教授に、ご自身のユニークな経験やITの今後などについてお伺いした。

TOGETHER  
TALK  
トウギャザートーク

これからはユーザーがITを引っ張っていく時代。  
だから私はいいユーザーがたくさんいる日本に期待します。

### ロック・ミュージシャンから 通信・放送のルールづくりへ。

岡野 ご出身は京都ということですが、京都大学を卒業するまでずっと京都だったのですか？

中村 実は、小学校一年生までは静岡にいたんです。安倍川のほとりで、隣が静岡商業高校のグラウンドでした。

岡野 あーそうですか。静岡でしたか。急に身近な感じが…(笑)。ところで、大学在学中はロック・ミュージシャンを目指されていたとか？

中村 そうです。大学にはほとんど行かないで、音楽ばかりやっていましたね。

岡野 卒業後、郵政省に入省されるわけですが、音楽の道を断念された理由はなんだったのですか？

中村 当時の自分よりもっと若い、バンドをやっていた子が、いいギターを持っているんですけど、ビール瓶を拾い集めては酒屋に持つて行き、そのお金でパンを買うという生活をしていました。それを聞いた私は「ギターを売ればいいじゃないか」と言つたんです。でも彼は「オレにはこれしかない。こういう暮らしをしても音を出したい」と言うんですね。その言葉を聞いた瞬間、「こういう人たちには勝てない」と思いました。それで、音楽の道を断念したのです。ただ、自分も何かを創造したり、表現したりする道を目指していましたから、同じ思いを持つ人たちが、思う存分才能を発揮できる環境をつくってあげたいなと思ったんです。

岡野 表現の場を提供する器としては、放送局や通信会社、広告代理店なども思い浮かびますね。

中村 そうなんです。始めに、そういう業種が思いついたのですが、よくよく考えているうちに、通信や放送のルールをつくりing郵政省に魅力を感じました。才能のある人たちがその能力を発揮できるような社会にするためには、通信や放送のルールを時代に合わせて変えていかなければならないと思ったんです。

岡野 役人になりたかったわけではないんですね。

中村 ええ。通信や放送の行政をやりたかったんです。それで、1年間籠もって勉強して郵政省に入りました。



### 派遣先のパリで感じた、 世界との格差。

岡野 入省されてからは、夢かなって、通信・放送のルールをつくる仕事に携わったのですか？

中村 はい、郵政省には14年いたのですが、ほとんど通信・放送行政を担当させていただきました。

岡野 1993~95年には、パリに派遣されていますね。

中村 はい。仕事の中身としてはスパイみたいなものでした。

岡野 スパイですか？(笑)。

中村 大使館勤務やOECD(経済協力開発機構)などのように正面からではなく、財団法人郵政国際協会パリ所長の肩書きで、裏から情報を収集するのです。当時のフランス、ヨーロッパの国々がどういう通信・放送戦略を出てくるかとか、アメリカはどう出るかということを観察して、では日本はどうするのかについて外から発信するような仕事でした。

岡野 当時、通信・放送戦略でいうと世界はどのように動いていた時期だったのですか？

中村 「情報ハイウェー」ということをクリントン＝ゴア政権が言い出した頃で、世界的にも大きく動いていたときでした。そんなとき、1993年でしたが、アメリカがヨーロッパ各国に映画産業の解放を迫ったんです。ところがヨーロッパ、特にフランスは、「映画は産業ではなく文化だ、民族のアイデンティティだと、だから簡単に門戸を開放するわけにはいかない」と…。

岡野 真っ向から対立しましたね。で、日本はどのような立場を取ろうとしたのですか？

## プロフィール ● なかむら いちや

1961年静岡生まれ、京都市出身。京都大学経済学部卒。大阪大学博士課程単位取得退学。84年郵政省入省、電気通信局で通信自由化に従事した後、放送行政局でCATVや衛星ビジネスを担当。登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は官房総務課で規制緩和、省庁再編に従事。98年9月～02年8月、MIT（マサチューセッツ工科大学）メディアラボ客員教授。02年9月～06年8月、スタンフォード日本センター研究所長。06年9月から慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構（DMC）教授。02年9月からNPO「CANVAS」副理事長を、04年4月から国際IT財団専務理事を兼務。また、コンテンツ政策研究会幹事、ポップカルチャー政策プロジェクト世話人、メディア融合研究会世話役、文化審議会著作権分科会専門委員、情報通信審議会専門委員、総務省参与などを務める。著書に『インターネット、自由を我等に』『デジタルのおもちゃ箱』『日本のポップパワー』など。ホームページ <http://www.ichiya.org/>

中村 それがですね、「日本の立場はどっちなんだ」と問われて、日本政府に問い合わせたところ、帰ってきた答えが、なんと「担当している役所がない」でした(笑)。

岡野 国家のスタンスとか戦略とかいう以前の問題ですね(笑)。

中村 日本はそんなときに、ちゃんと主張ができる国でしたね。

## アニメ・マンガは、日本が世界に誇るポップカルチャー。

岡野 当時パリから日本を見て、仕事以外に気づかれたことはありますか?

中村 日本は、自分たちの強みというか、魅力に気がついていないと思うことが多かったです。今では海外で評価されているものとしてアニメやマンガなどが知られていますが、当時でもモノづくりの水準の高さとか、食べ物の豊かさということが非常に評価されているのに、日本人自身がそのことに自信をもって海外にアピールしていないなと感じていました。

岡野 モネやゴッホなど、ヨーロッパには浮世絵の影響を受けた画家たちが非常に多いですね。もともと浮世絵がヨーロッパに渡ったのは、伊万里を輸出するときの包装紙としてだったそうです。それが、今では芸術品としてパリの「ギメ東洋美術館」にたくさん所蔵されています。中村さんのお話を聞いて、それを思い出しました。

中村 浮世絵は江戸時代のいわばポップカルチャーでした。

岡野 でもヨーロッパの人たちはそこに、高い芸術性を見いたしたんですね。

中村 その審美眼の確かさには敬服します。そして今それと同じようなことがアニメやマンガなどで起こっているのです。

岡野 日本を代表するポップカルチャーであるアニメやマン

ガが、認められ始めたのはいつ頃ですか?

中村 2002年のベルリン映画祭で、宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』がアニメで初めてグランプリを獲りましたが、そこから日本のアニメやマンガなどのポップカルチャーが、クールだとか、ポップだとか、キュートだとかと言われているという海外からの情報が日本に入るようになって、世界的に凄いことになっているんだなということに日本側が気づいたんです。

岡野 日本のアニメやマンガはどこが優れているのですか? 海外の子供たちになぜ受け入れられているのでしょうか?

中村 単純にキャラクターがかわいいとか、ストーリーがおもしろく大人が見ても耐えられるということ。それに、規範がないというかルールが薄いというか…。こういう、“あやふやな”性質がかえって強みとなっているのだと思います。

岡野 海外でテレビを点けるとよく日本のアニメをやっていて、あらためて凄いなと感じます。今どうなっているんでしょうか?

中村 世界のテレビアニメの60%が日本製です。ポケモンは69カ国でオンエアされていますから、ほとんどの先進国で見ることができます。

## 郵政省を退官し、MIT客員教授に。

岡野 パリから日本の郵政省に戻られて、しばらくしてからMIT（マサチューセッツ工科大学）の客員教授としてボストンに行かれます。きっかけはなんだったのですか? そのとき郵政省はお辞めになるんですよね。

中村 橋本内閣の時の省庁再編で、郵政省と自治省と総務庁が、合併して総務省になるんですけど、政治決着するところで担当しました。そこで、仕事として一区切りできたと思ったことがひとつ。もうひとつは、課長クラスつまり幹部になると、秘書と黒塗りのクルマはつくかもしれないけど、産業界と国会議員の間を回って、調整するという仕事になるんです。

岡野 案をつくるのは、若い人たちがやるんですね。

中村 そうなんです。前にも言ったように、私はルールがつくり

たくて役所に入ったので、調整役になるのはいやだなと思ったんです。

岡野 そんなときにMITの話があったと。

中村 はい。たまたま、セガの大川さんの寄付で、MITにメディアと子供に関する研究所を創ろうというプロジェクトがあったんです。そこに日本から一人派遣することになって、何年かかるかわからない仕事でしたので、郵政省を辞めて行くことになりました。

岡野 どのようなプロジェクトをやっていたのですか?

中村 子供のために、新しいITを使って新しいコンテンツを生んでいくということでした。例えば、トイシンフォニーというプロジェクトで、新しいデジタル技術を使って子供が誰でも演奏できる楽器をつくり、お絵かきをすれば音楽ができるという作曲ツールをウェブサイト上につくったりしました。

岡野 日本に戻ってこようと思ったきっかけは何だったのですか?

中村 結局、いろいろやっていくうちに、ITは大学や企業の研究室が生むというよりも、これからはユーザーが引っ張っていくものだということがわかってきたんです。確かに、80年代は東海岸の大学の研究室が創っていたんですね。90年代になって本場が西海岸に移って、スタンフォードとかシリコンバレーとかのIT企業が世界に商品やサービスを広げていきました。

岡野 その結果みんながパソコンやケータイを使えるようになった。

中村 そうですね。では次はどこが本場になるかというと、楽しいユーザーや厳しいユーザーがたくさんいるところ、それは日本だと思ったんです。特に今世紀に入ってから、日本の特に若いユーザーがどんどん使いこなしているなということが見えてきましたので…。

## 日本の女子高生に見る日本人の潜在能力。

岡野 楽しいユーザーと厳しいユーザーが日本にはいるということでしたが、それはどこで感じられますか?

中村 例えば、日本のケータイは外国のものに比べて飛び抜

けて機能性が高いですよね。メールはもうすっかり定着していますし、写真が撮れるのは当たり前で、テレビ電話機能がついているたり、動画が送れたり、クレジットカード代わりになったり…。

岡野 あれは電話というより、持ち運べる小さなメディアですね。

中村 未だに欧米に行けばケータイは電話。耳と口の道具です。それに対して日本・韓国など東アジアでは、読み書きの道具としても使われています。それは、メーカーとか通信会社がそうしようと思ったわけではなくて、ユーザーなんです。特に女子高校生が読み書きの方向にもっていったがったんで、サービスも商品もその方向に発達していったんですね。

岡野 メールで思い出しましたけど、ある世代以上の知識になると、今の女子高校生たちが使っているギャル文字やキャラ文字はとんでもないと言う方もいらっしゃいますが、あれも一つの文化なのでしょうね。

中村 千年くらい前の平安時代の女性たちが、中国から来た漢字を勝手に仮名に変えて女流文学をつくったという歴史があります。その当時の知識人とか大人の男からすれば、けしからんことをやっていると思っていたでしょうね。今の平成女性たちがやっている新しい文字を創るということが、10年、20年たつてどう評価されるかわかりませんが、ひょっとすると大きなことが起こっているのかもしれませんね。

岡野 ただ、ひとつ心配がありましたね。OECDの調査では、日本の15歳児のIT活用度が加盟国中で最下位クラスだそうですね。どういうことなんでしょうか?

中村 子供がITを使う分には非常に早くマスターします。ただ、それを教育としてどう教えるかということになると、なかなか進まなくて…。どれだけ目をつぶって子供に使わせることができるか、そういう使える場を与えることができるかが問題なのだと思います。

岡野 ついつい、「これはしゃいけません」となりますからね。



